

赤不動圖年代考補記

田 中 喜 作

私は本誌第九十九號昭和十五年三月發行誌上に『赤不動圖の製作時代に就いて』なる一篇を發表して、此の野山傳存の名跡が、到底方今學界の一部に信じられて居るやうな鎌倉末期以後の製作に係るもので無いことを主張した。そして私はそれが必ずしも從來學者の所見の如く弘仁期の一畫跡でなければならぬと主張するものでは無いが、少くとも藤原初期を下るもので無い以上、弘仁説を否定すべきで無いことを力説した。その目的とする所は近時學問の名に隠れて、極めて薄弱な根據に依つて強ひて異説を樹てようとする一種の流言の横行を警めるに在つたが、圖らずも本圖の圖相が大日經にも、三卷底哩三昧耶經にも、一卷軌にも、また不動使者法等、空海以來當代の入唐諸家が相次いで請來した諸經を出典とするもので無いと云ふ點と、また一つには其の圖様が極めて遺例の少い俱利伽羅不動であると云ふ點とから、或はそれが修驗道の先蹤を爲す一信仰の本尊でなかつたかを考慮して、もしかするとそれは俱利伽羅龍王經、即ち俱利伽羅大龍勝外道伏陀羅尼經に出たもので無いかの憶測を加へたに對して、近時某氏は中外日報紙上及び『茶わん』九月號誌上に於て、痛く私見を難詰されたさうである。私は不幸にしてまだ其の何れをも讀んで居ないが、傳聞する所に依ると、俱利伽羅龍王經は秘密辭林に明記されて居る如く、近世本邦の撰述に係る僞經の一種であつて、それをも

知らない無智の輩が佛教美術を論ずることが、そも／＼僭越至極の沙汰であると云ふにあるらしい。既に問題が其の點に止まつて美術史的な批判に觸れない以上、私は強ひて此の某氏説に言及する必要は無いと共に、それあるがために、私は強ひて斯説を讀む必要をも感じないのであるが、事我々の美術研究所に關する以上、私の前説を補記する意味に於て斯經に就いて一言しておくこととしたい。

元來私があの舊稿一篇を書いた時、既に此の俱利伽羅龍王經が僞經の一種であるかも知れぬことを知つて居た。知つて居たからこそ舊稿の第八頁下段初行に於て『驚くべき矛盾とは、こゝに云ふ俱利伽羅龍王經の請來年代の不明及び其上に斯經成立の疑問をすら考へなければならぬことである』と説いておいたのである。それは白寶口抄九十九卷に『佛說俱利伽羅大龍勝外道伏陀羅尼經云』として其の一節を抄記したくだりに『此經決定僞造』の六字の側註を施し、尙是れに加へて僞經なるが故に、其の説く所が誤つて居る意味を註記して居ることを知つて居たがためである。それにも拘らず私が赤不動圖の出典説として或は斯經の如きが考へられるのではないかとしたのは、それが僞經であると正經であるとは専ら經典書史の問題であつて、信仰史の問題ですら無いと共に、尙更繪畫の問題では無いので、少くとも赤不動圖に係る限り、正僞の問題を離れ

て、寧ろ其の撰述の年代如何が重要であるに過ぎないのである。これは事理極めて明白であつて、誰人も疑ひ得ないが、さて其の撰述年代に至つては、不幸にして明白にするを得なかつたのである。従つて當時私は是れを其の道の専門家に質すことを考慮しなわけでも無かつたが、未だ曾て他家の智識によつて自説を飾ることをしなかつた私の性來の頑愚は、それをも敢てしなかつたと共に、此の種の問題は道の先輩の所説も、殆ど凡ての場合容易に信じ得ないことを豫想して居たがために、強ひて質す必要を感じなかつたのである。殷鑑は決して遠くはない。秘密辭林がどれだけ正確であると考へられるにしても、要するに啓蒙を目的とするもので、特殊な問題に臨んでは何程の智識をも、我々に教へるものではない。殊に白寶口抄がある以上、そんな近時の編纂ものの説を入れる必要がないと信じたがために、それに言及しなかつたに過ぎない。

要するに問題は斯經の撰述年代である。従つて某氏が若し私の擧げる白寶口抄以前に偽經説に觸れて、而も其の年代を斷定した文献があるなら、私は敬意を以て其の説を聞くが、近時の編纂ものに依據するものである限り、不幸にして私にとつては何程の問題でも無いと共に、尙更私を難詰する材料とはならないのである。白寶口抄は云ふまでもなく寶蓮華寺亮尊の大著であつて、弘安を中心とする撰述である。素より他の先覺の遺著に比しては時後れる述作であるにしても、少くとも其の師亮禪の關與せることは明かである。其の上、上記の『此經決定偽造』の六字は當然後代の誰人かの加記と見るべきであるが、亮禪乃至亮尊が、さうげなくも本文中に斯經を抄出して居ることは、少くとも此の兩大德以前相當の年次を経た撰述或は請來でなければならぬ。従つて若しこゝに強

ひて自説に有利的に解釋しようとするなら、尙遠く憶測を逞くする道はあるが、私は今其處まで敢てする考は毛頭無い。それだけ結局兩大德以前果して何の時の撰述或は請來かを明にし得ないと見る方が正しい。

大體私はあの自説のうちに斯經を擧げたが、然し私の本旨は大日經以下上記の諸經を、赤不動圖の出典とするものと考へられない以上先づ感見畫説による外は無いので、だからこそ私の舊稿では先づ最初に是れを説いたのである。そして論旨を進めて修驗道の先蹤としての本尊でなかつたかを説くに至つて、俱利伽羅龍信仰を中心とする斯經に及んだのである。然し俱利伽羅龍が斯經以外に出典を求め得ないと云ふ理由の無いことも明かであるから、私は強ひて斯經出典説を固執するものではない。さればこそ私は若し斯經の成立が明かになつた曉には、容易に私の斯經出典説のみに關しては破れるかも知れないことを特記しておくことを怠らなかつたのである。私は決して不用意に自説を發表するものではない。のみならず私があの舊稿を草する時、既に或は讀者の誰人かが、偽經説によつて論難するかも知れないことを豫想しながら書いたのであつたが、然し此の某氏説によつては、まだ――私を難詰するには足り無いので、今日尙私は前説を翻さうとは思はない。殊に我々の美術史の様式論と其れに依る年代推定とに至ては、私の自信は到底某氏説に煩はされるものではないと共に、恐らく世の識者も煩はされるものでないであらう。

さるにても佛の教理教説は極めて易解であり易入でありながら、また難解であり難入である。其の秘奥は中々に我々の窺ひ盡し得るものではない。云ふ意は天然、震旦から我が邦に及ぶ無數の先賢が、苦行練習の

成果の跡の如き、到底我々の一々に知悉し得る所で無いことに在るが、それだけ彼等先賢の遺著の書史的研究の如き、單に我々門外の徒輩のみならず、某氏に於ても亦同様であらう。斯うして私は佛教美術に關する限り、常に私の愚昧の性を今更に嘆ずる外は無いものであるが、而もそれだけ私は私の能ふ限りの用意を常に忘れて居ないことを自白するものである。そして私は此の一篇の補記によつて、讀者の誤解を避ける傍ら、併せて僭越ながらも某氏の前に白寶口抄があることを申上げながら、若し時が來るなら、何時でも此の俱利伽羅龍王經出典說だけは撤回する用意があることを申述べる。

其の上私は特に申述べる。佛の教理教説が難解であり難入である如く藝術のこと亦それである。其の秘奥に至つては到底門外の窺知し得ないものがある。どれだけ個人的な自信があるにしても、識者から見れば、それは一片の流言に過ぎぬかも知れぬ。『流言止於智者』と荀子は言ふが、智者が思ひの外世に稀なことはお互に悲しむべき事實であると共に、流言の警しむべきも亦尙更である。聞く所に依ると、近時また／＼青蓮院の同じ俱利伽羅不動圖鎌倉説を唱へた人があると云ふ。こゝに至つて世は擧げて澆季であるの嘆は極めて深い。私は今更に世の智者が餘りに寛大であることを痛嘆せざるを得ないものである。(九月廿日)